

後期デリダにおけるハイデガーの遺産相続(4)

『死を与える』と責任、贈与

大江倫子(首都大学東京)

デリダの1989年のシカゴでの講演「ハイデガーの耳」は、いわゆる倫理的転回の起点の時期にあつて、直後の諸テキストで展開されその後の倫理・政治的言説の論拠となる主題群、正義、責任、贈与などがハイデガーにおける存在論的聴取のモチーフに即して論じられていることから、そのハイデガーへの負債が直接読解できる重要なテキストである。拙稿「後期デリダにおけるハイデガーの遺産相続(1)」では、とくに存在の究明としての哲学に言い応ずる実存論的責任、および受贈者の本質を現成させる存在論的贈与について、また異質のものを融合させずに保持する存在論的力 *Walten* が存在論的贈与を可能にしていることについて、デリダが慎重な検証を重ねつつ自己の思想として練り上げる過程をテキストに即して報告するとともに、その後5年間にデリダが発表した講演や著作においてこうしたモチーフがいかに展開されているかの概要を示した。すなわち『法の力』では前述のモチーフに基礎づけられた実存論的正義と意思決定についてのアポリアの論理の練り上げ、『他の岬』ではヨーロッパの文化的責任というアクチュアルな課題へのその適用、『死を与える』『時間を与える』では宗教や文学の倫理への論理的接続とそこでの展開、『アポリア』『マルクスの亡霊たち』では他者一般の必然性の論理的補完さらには超越論的他者論としての憑在論の提起、『友愛のポリティクス』では以上の諸モチーフを論拠に古典的政治論と対決しつつ実存論的政治の場所を画定する。

1990年12月フランスで行われた講演「死を与える」は、「ハイデガーの耳」に続いて行われた一連の政治的主題の講演の終結として、また翌年から始まる文学作品や宗教テキストと哲学著作を同時に論じる一連のセミナーの予告として、フランスにおけるデリダ著作の受容の新段階を画するきわめて重要なテキストである。これまでの外国講演とは異なって、哲学と精神分析について高度な専門知識をもつ聴講者を前提し、精密な論理を展開しつつ、ヨーロッパ文明の責任から出発して宗教をも包括する倫理思想へと開くことが可能となり、この時期から晩年に至る一連のセミナーの現象学的存在論に基づく一貫した論理的基盤が確立されつつあることが確認できる。ここでは引き続き責任と贈与のモチーフが、新たに死、秘密、歴史の主題を導入しつつ、超時間的存在論へと練り上げられている。この後まもなく授与されることになる名誉博士号や叙勲の契機となつたであろう意義深いテキストであるが、論理的前提の複雑さゆえに十分読解されていない。本稿ではまずテキスト全体の論理構造を明らかにした後で、デリダの先行テキストで提示されたモチーフである責任、贈与、死、歴史についてデリダの思想の一貫性を確認し、次に新たに導入された存在論的「秘密」のモチーフについてハイデガーのテキストと比較しつつ考察することで、形成途上にあるデリダの現象学的存在論としての遺産相続を解明することを試みる。

『死を与える』の第1章はチェコの思想家パトチュカの、ヨーロッパ文明を論じるテキスト「技術文明は凋落した文明か、それはなぜか」の読解から、責任のモチーフが論じられる。パトチュカはまず文明の評価基準一般を提示するが、『存在と時間』の論理を語り直すかのような論調でありつつ、独自の

視点を導入してもいる。パトチュカは本来の生のあり方を「責任」と名指し、プラトン主義とキリスト教が「オルギア的なもの」を克服することによりそれが形成されたとする西洋の歴史観を提示する。この思想を厳密に評価することで、デリダは自らの責任と贈与の思想をさらに練り上げていく。その過程で評価基準として導入されるのが存在論的秘密のモチーフである。結論としてパトチュカの責任の論理は、秘密や可死性を否認する局面があり、精神分析的な犠牲のエコノミーの記述にとどまっている。しかしキリスト教の論理として責任を絶対者による死の贈与と関連づけることにおいて、責任の源泉を無規定に残したハイデガーを超出する。

第2章ではこの死の贈与についてさらに考察を深める。パトチュカの贈与と死の論理について、デリダはハイデガー存在論の死へ臨む存在における死の代理不可能性の前提から、これを責任の条件として承認する。結論として、こうした責任と贈与の条件としての代替不可能な独異性、それを可能にする唯一のものとしての死、有限な自己と無限の善性との絶対的非対称としての根源的罪責性が演繹される。またパトチュカのテキストにはキリスト教的な主題が多く見られるが、啓示に依拠するのではなく哲学的な論理で宗教なしに宗教の可能性を反復するのであり、哲学から演繹される宗教を確認する。

第3章、第4章では以上の練り上げられた存在論の仮説の妥当性が、文学テキストと現代の社会状況において検証される。第3章では秘儀の形相分析から、またキルケゴール『おそれとおのき』のテキストに表現されたイサクの供犠の解釈において、前章までの帰結である全く他なるものとしての神、倫理的なものの踏み越えとしての宗教、非対称性が要求する秘密の必然性が読解可能であることを提示する。

第4章では以上の論理を踏まえ、宗教と道徳が混同されることとして現代社会の責任麻痺状態を説明し、克服のために宗教的なものの再定義を試みる。すなわち神は属性を備えた存在者ではなく自己の意識構造であると結論する。

次に以上の論述において前提されている責任、贈与、死、歴史についてデリダの過去のテキストを参照してその意味作用と論理を確認することで、デリダの論述の一貫性と妥当性を検証する。またデリダが今回初めて導入する存在論的秘密のモチーフについてハイデガーの論考を参照することで、存在論的思想の評価基準としてのその妥当性を検証する。前述のとおりデリダは講演「ハイデガーの耳」において、存在の聴取としての責任、受贈者にその本質を与え返す存在論的無償の贈与に着目した。その翌年の講演『他の岬』では責任が実存論的アポリアと関係づけられる。またデリダは1980年の著作「思弁する—フロイトにつて」でフロイトの晩年の著作「快原理の彼岸」を読解して、そこで提起される死の欲動のテーゼにハイデガーの死へ臨む存在を重ね、そこに存在論的照応を見る。また開かれた歴史の前提については、『存在と時間』を講じた60年代のハイデガー講義『ハイデガー—存在の問いと歴史』において「世界が現存在の超越と自由から変容する」こととしてとくに注目している。秘密のモチーフはハイデガーにおいて、超越的な存在の作用の連関が有限な存在者には覆蔵されたままに留まることとして存在論的である。とくに「真理の本質について」では問いの必然性を到来させるものとして覆蔵性の積極的意義が強調されている。